

## 幕末明治の写真師列伝 第八十六回 宮下欽 その八

先鋒の高田藩兵と第二陣の尾州藩兵がまだ到着しない状態ではあったが、本隊の松代藩兵は下山谷村にて待機して、この二藩の兵を待つこととなった。

一方、片貝に布陣している敵は、会津藩の総督、一ノ瀬要人が指揮する鎮将隊の300名と、同じく会津藩の猛将、佐川官兵衛の指揮する四隊で、これに古屋作左衛門の衝鋒隊の部隊も加わった精鋭部隊であった。これは越後方面の会津藩の主力部隊である。

翌5月3日、ようやく先鋒の高田藩兵と第二陣の尾州藩兵が追いついたので、総軍は片貝へ向かって進軍する。小千谷から北へ8キロの鴻田原に総軍が到着した時、敵がこれを発見して、砲撃を加えてきた。直ちにこれに応戦してこちらにも敵に砲撃し、松代藩と高田藩の部隊は本道をそのまま進軍し、左翼からは尾州藩兵と高田藩兵の一分隊が進軍する。敵は薬師嶺と榎嶺の各所より出沒して攻めてくる。そのため各所で激戦となり、松代藩も苦戦を強いられることとなった。この状況を見て参謀の近藤民之助が指揮して、松代藩の五番狙撃隊と十二番大砲隊で応戦することになった。しかしながら敵の猛攻すさまじく、近藤参謀は薩長本陣へ伝令を走らせて、救援を依頼する。薩長の急速な応援によって頑強に抵抗していた敵もようやく衰え、松代藩の大砲部隊による攻撃もあって、敵は長岡方面へと敗走してゆく。こうしてそのまま残敵を追撃して、朝日村に到り、この山上に陣して守備を固めることになった。この片貝の戦いで敗走した会津軍と衝鋒隊、出雲崎方面から退却した桑名藩兵は、5月4日から7日頃までの間に長岡城に集結することになった。これ以降、これらを含めて同盟軍と記すことにする。

同盟軍の諸将は、長岡藩の総将、河井継之助、会津藩の総指揮官、一ノ瀬要人、軍将、佐川官兵衛、桑名藩の家老、町田老之丞、軍将、立見鑑三郎、衝鋒隊の指揮官、古屋作左衛門、参謀、坂本平弥の諸将である。この諸将が協議して、5月10日を期して逆襲することを決め、まず榎峠の奪回と朝日山、妙見山の確保を目標とすることになった。そのため同盟軍は、本道(三国街道)をゆく長岡藩兵(八小隊)を攻撃部隊とした。このうち会津藩の佐川官兵衛指揮する四小隊を後続の本道応援部隊とし、桑名藩の二小隊、衝鋒隊を遊軍及び迂回奇襲部隊とすることを決めた。その他にも地理に明るい長岡藩の部隊は、前島(信濃川右岸)、草生津(長岡の西関原へ着く信濃川渡船場)、蔵王(信濃川右岸で長岡城の西2キロの地点)、下条(長岡の北3キロの地点)に配置され、その一部は長岡城下の巡察、警部も行っていた。

長岡城は信濃川の東側にある北陸最大の同盟軍拠点である。また長岡藩筆頭家老の河井継之助は長崎にも留学し、長岡藩の藩政改革、軍制改革を行ってその兵備も洋式軍隊に改変して訓練していた。長岡藩の部隊は、小銃隊が二大隊(十六小隊)で一小隊は33名で編成されていた。その他に大砲は洋式大砲が16門、和式大砲を12門あり、さらに回転式の機関銃であるガトリング砲を2門所有していた。これは横

浜のアメリカ人の武器商人のスミスから入手したもので、当時の日本には3門しか存在せずそのうち2門を長岡藩が所持していたのである。

岩村監軍指揮の山道軍は次の作戦としては、当然、長岡城の攻略を計画していたのだが、連日の雨のため信濃川の渡河が困難となっていたため、その減水を待ってしばらく待機していた。山道軍は信濃川の右岸と左岸に分れて待機していたわけであるが、お互いに連絡が取れないような状況であった。こうした状況を察知した河井継之助は榎峠の再奪還を図り、5月10日(1868年6月29日)に榎峠とその周辺の高地(朝日山、妙見山など)を攻撃するため、長岡藩の山本帯刀指揮する長岡藩兵、八小隊を出発させた。この部隊を支援するため会津、桑名、衝鋒隊などの旧幕府兵がその後続く。

山本の攻撃部隊は、妙見より榎峠へ進軍する萩原要隊長(長岡藩軍事掛)指揮する四小隊(大砲2門)及び会津藩の佐川隊と、村松より東金倉山を経て妙見南方の台地へ進軍する川島億次郎隊長指揮する四小隊及び会津菅野隊、桑名隊、衝鋒隊に分れて進撃した。

これに対して信濃川の東岸にいた山道軍は、長州藩、尾州藩、上田藩の五小隊のみで、榎峠を守備していたのはこのうち上田藩、尾張藩の各一小隊だけ(約80名)という状況であった。このため信濃川の西側、三仏生(みぶしょう)にいた山道軍は、急遽、信濃川の妙見の渡し場から東岸に渡河するべきと、薩摩藩、長州藩、松代藩、尾州藩の部隊は、大金を支払って舟を借り上げようとするも、舟を操る舟子が逃亡してしまっていた。ようやく小千谷村庄屋の半左衛門らの手助けで十余人の舟子をとらえ、舟を出すよう命じたが一人も応じない。尾張藩の隊長の脅しと小千谷村庄屋半左衛門の説得、そして川水もわずかであるが減り、尾張藩隊長が舟一艘に百両出すということで、ようやく舟子たちも応じて舟が出ることになったという(舟子たちには後日一人3両が支払われた)。10日の昼頃から信濃川の渡河を開始した。

しかし、同盟軍の方もこれに対して川幅の狭い場所に移動して、土堤の上から射撃を始め、妙見の渡し場を使えないようにしていた。この援軍の山道軍は一回の渡河で、4、5名ずつしか渡れない。高梨村にいた松代藩の大砲部隊もこの同盟軍に対して砲撃するも、同盟軍の方もこれに対して大砲で反撃してくる。午後3時、街道を南下した萩原要人率いる隊が榎峠攻撃を開始する。榎峠の上田藩、尾張藩兵がこれに応戦する。しかし、榎峠と信濃川を隔てて対岸に布陣した松代藩兵が援護射撃したため、同盟軍の兵士は動きがとれなくなる。

石井勇次郎の『戊辰戦争見聞略記』によれば、「同十日、諸軍朝日山、妙見山に進撃し大いに敵軍を破り朝日山、城山、妙見山等に胸壁を築き守る。敵も亦山上に壁を築き相対する。間数丁を阻ち壁中よりして屢少く戦う。而已河岸は信濃川の急流を阻て互いに相対するの間亦数丁を阻ち、胸壁を築て日夜大小砲を放つ」という激戦となった。

(森重和雄)